

よりやすいせき 4. 寄安遺跡

所在地：福井市栗森町

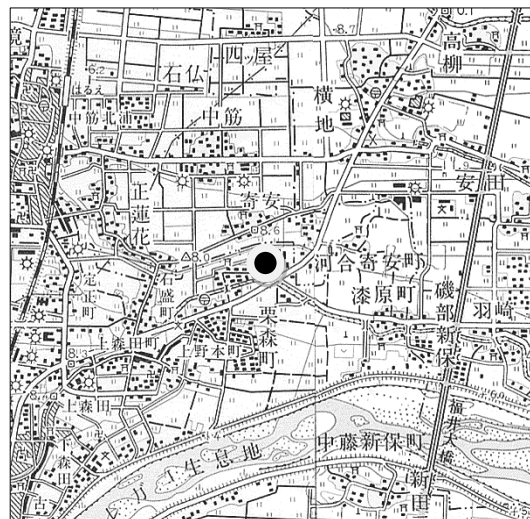
調査原因：北陸新幹線建設

調査期間：平成26年4月1日～5月30日

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：2,000 m²

時代：弥生、古墳、鎌倉



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 寄安遺跡は、坂井市春江町から福井市栗森町にかけてひろがり、九頭竜川右岸の自然堤防上に立地する遺跡です。今回の調査地は、福井市内の北陸新幹線建設予定地のもっとも北側となります。調査の結果、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてと鎌倉時代（13世紀代）を中心とする遺跡であることが判明しました。標高は約7.7mを測ります。

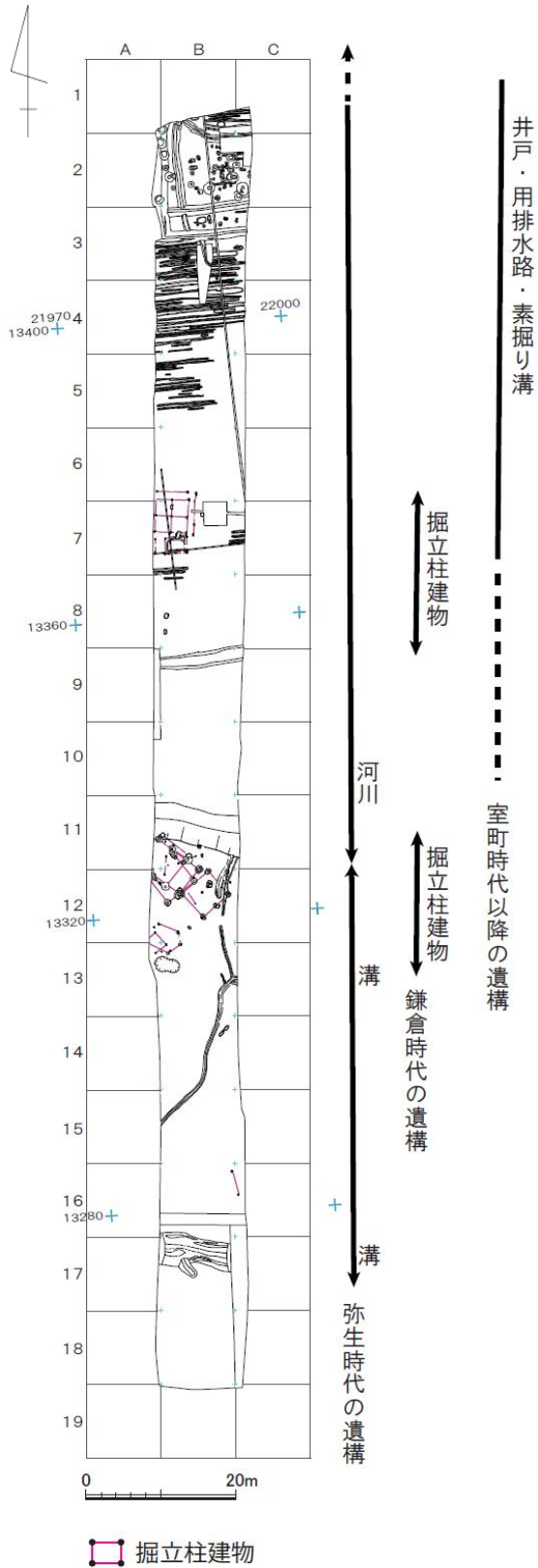
遺構 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構は、調査区の南側に集中します（第1図）。住居などの建物は見つかりませんでした。複数の溝と1条の河川を確認しました。それぞれ内部から土器や石器が多く出土しました（写真1・2）。土器の多くは破片ですが、もとの形に復元できるものも多いことから、この場所に捨てられたものと考えています。河川は規模が大きく、深さが2m以上あります。調査区内では北側の川岸は確認できませんでした。河川が完全に埋まったあとで鎌倉時代の遺構がつくられていることから、この河川は古墳時代から鎌倉時代までの間、大きな洪水などによって、水の流れが変わってしまったようです。

鎌倉時代の遺構は、調査区のほぼ中央部に集中します。主な遺構として、掘立柱建物8棟と土坑1基を確認しました。掘立柱建物は柱穴の大きなものと小さなものの2種類に分けられます。小型の柱穴をもつ建物には、垣根と考えられる側柱を伴うもの、内部に浅い土坑を伴うものがあり、大型の柱穴をもつ建物には、同じ場所に3回ほど建て替えたものがあります（写真3）。また、建物の柱穴には、輸入白磁皿や土師質皿の破片を含むものや、柱材が残っていたものもあります（写真4）。柱材には角材と丸太材の2種類があります。

遺物 遺物の多くは遺構から出土しており、弥生土器と古墳時代の土師器を中心として、鎌倉時代の土師器や弥生時代の砥石なども見つかっています。

まとめ 今回の調査により、狭い範囲でも時代によって土地の利用の仕方が異なることがわかりました。その理由のひとつとして、河川をはじめとする自然環境の変化があげられます。弥生時代から古墳時代にかけては、遺構から多くの遺物が出土することから、調査区の周辺に住居が存在することは明らかです。鎌倉時代では、建物の存在から集落域であったと理解できます。今後は、ほかの遺跡の調査例と建物の規模や柱穴の並び方などについて比較を行い、これらの掘立柱建物が一般的な住居かどうか検討する必要があります。

(山本孝一)



第1図 調査区全体図(S=1/1,000)



写真1 弥生時代の溝(北東から)



写真2 弥生時代の河川の土器



写真3 鎌倉時代の掘立柱建物



写真4 鎌倉時代の柱穴(北東から)